

『雪国の夏』

著作 a s h

※この話は『kanon』を元にした二次創作です。

誰かが言ってたよな、ここは雪国だって。

俺も確かにそう思っていたさ、春になるまでは。

だいいち、冬があれだけ寒いんだから、夏はそれなりに快適に過ごせるだろうと、勝手に思い込んでいたんだ。

そう、勝手にな。

だけど。

雪国だからって、夏にも雪があつたりするわけじゃないのも分かつてる。そもそも、そんなところに住むくらいなら、親父たちと海外でもどこでも行った方がましに決まつてる。

だけど、な。

そりゃ確かに夏になれば、水泳の授業だつてある。俺だつて水泳は嫌いじゃないし、名雪に限らず女子の水着姿を楽しむにするのは、高校男子としては至極当然だと思う。

だけど、だ……。

……。

「何で、こんなに暑いんだよっ！　これで雪国ってんだから、まさに世紀末だよなっ」

『雪国の夏』

(作者注：本作品の設定では、まだ世紀末です)

俺の声に合わせるように、セミの声が窓越しに一層大きく響いてきた。

外はまさに夏の好天そのもので、嫌なくらいに青い空と、遠くに大きな雲が見える。夕立なんて時間でもないし、一雨きたところでさっぱりとするわけでもないのだから、余計に俺のやり場のない怒りはふくれるばかりだった。

だが、セミの声に負けないほどの大きさで、なおかつ俺の怒号に負けにくいぐらいの不機嫌さをまとった返事があった。

「祐一、さっきからずっとうるさいわよっ！」

声の主は真琴。不機嫌さを強調するように、だんつと両手をテーブルに広げて、俺を睨んでいる。

「暑いから暑いって言うてるだけだ！ そもそも何でこのクソ暑い日に、エアコンが壊れた俺の部屋で勉強なんかしなきゃいけないんだよっ」

「だって今日は美汐ちゃんも一緒に、真琴の部屋じゃできないんだからしょうがないじゃないっ」

そうなのだ。

今日は天野が久しぶりに真琴の勉強を見てくれるわけで、別段俺がずっと付き合う必要はないはずなのだ。まして、俺の部屋でやる必要なんて、これっぽっちもない。

ちなみに、こうしている瞬間でも、天野はいつもとさほど変わらない真面目な表情で、

俺と真琴の様子を伺っている。さすがに俺と真琴のこんなやり取りにも慣れたようだ。まあ、天野はとりあえず置いとくとして、だ。

『雪国の夏』

「だいいち、それがおかしいってんだ。何でお前の部屋でできねえんだ？」

「それは最初に説明したじゃないのっ！ 祐一ったらもう忘れたの？」

真琴の説明とやらは、天野が来たと同時に、「今日は祐一の部屋の方が片づいてるから、そっちでねー」と、俺の部屋に入りながら言ったことだろうか。いや、それ以外に且つそれ以上に説明らしい説明はないから、あれしかないに決まってる。

「誰も忘れたとは言ってない。不条理だと言いたいんだ。大体、お前の部屋が汚いのは、日頃からお前が散らかし放題やってるからだろうが！」

「あうーっ、祐一の部屋が一番広いんだからねっ！」

「元の大きさは、そんなに変わらないぞ」

「うーっ、そんなことばかり言っても、ホントにどうしようもないじゃないっ」

むーっとした顔で真琴は俺を睨み続けているが、まあ、確かに散らかり放題の自分の部屋を天野に見せるのは、真琴にしても恥ずかしいのは分かる。ただ、俺の部屋のエアコンがいきなり動かなくなっていたのは大きな誤算だった。

どうやら長いことほとんど使ってなかったところに、いきなり最大運転なんてやったのが原因らしい。いや、それまでは昨日までは普通に過ごせたんだ、エアコンなしでもな。

だけど、今日になっていきなり暑くなったりするのは詐欺ってもんだぞ。とにかく、エアコンのことは秋子さんに言ってるから、割と早い内に修理にくるだろうけど、この暑さはなかなか厳しい。

「暑いと言っても、これくらいならまだいい方ですよ、相沢さん」

いきなり涼しい声で、それとは反対に聞くだけで汗をかきそうなことを言ったのは、天

『雪国の夏』

野だ。

そんな話は聞いても嬉しいもんじやない、と言う俺の心の叫びを無視して踏みこむように、天野はさらに続けた。

「周りに山が多いですから、もつと暑くなる日もありますよ」

…どうやら、雪国なら夏が涼しいと言うのは、俺の妄想でしかなかったことが、この天野のひとことで決定された。だが、それで俺のこの怒りが収まるわけではないのも事実なのだ。

「それで、天野は俺にどうしろって言いたいんだよ？」

ふと天野の反応を試してみたくなったので、俺がわざと挑発しながら訊ねると、それでもやはり天野は涼しい声で返すだけだった。

「そうですね。とりあえずはいつまでも立ってないで、ゆったりとした姿勢をとって呼吸を整えることが大事だと思います」

「……至ってまっとうなアドバイスがあります」

つまりは、暑いさなかにいきり立ってはいは余計に暑くなるだけだと言いたいのは……よくつく分かる。根本的な解決にはなっていないことも含めて、な。

何となくそれ以上言う気が失せてしまい、俺は……やや脱力ぎみに苦笑いしながら腰を下ろした。

「少しは気が紛れましたか？」

「まあな……気が紛れたと言うか、気が抜けたと言うか、だな」

相変わらず天野は真面目な表情を崩さずにいるが、こども変わらないままに相手をされ

『雪国の夏』

てると、どんどんこっちの気力が喪失していくのは気のせいばかりじゃないだろう。

「それならよかったです」

「何がいいんだか……」

苦笑で俺が答えると、天野はそこでかすかに笑顔を見せてくれた。と同時に真琴と俺の両方に向かって言った。

「それじゃ、勉強の続きを始めましょう」

「ああ」

「うんっ」

こうして、俺は真琴のやっている問題集の方へと意識を向けていき、そのまま静かに五分十分と時間が流れていった。

俺の部屋に、鉛筆の音と、真琴の小さなため息と歓声と天野の説明だけが続く。

夏の日差しを受けた風が、そんな俺たちの間を通り抜けていく。

……だが、その風は決して涼しくもないし、心地よくもなかった。

……やっぱり、ダメだ。

もう辛抱たまらん。

「……やっぱり暑い」

ぼそりとはあるが、はつきりと他の二人に聞こえるように俺が不平を漏らすと、まず最初に真琴が反応した。

「祐一、うるさい……」

手を止めずに声だけですませているのが珍しいが、それだけ勉強に集中していると言う

『雪国の夏』

ことに違いない。いや、確かにこれは邪魔してはいけないのかも知れない……と、俺がわずかに迷っていると、今度は天野がやや困ったような表情でひとことだけ告げる。

「相沢さん」

これは間違いない。「邪魔するな」と言う意思の現れで、恐らくはこの後に俺に対する小言みたいなもんを延々と言い始めるに違いない。こうなったら先に言っておくのが一番だ。

「いや、天野が何を言おうが、この暑さは変わらないんだ！」
おもむろに俺が声を大きくすると、ついに真琴が手を止めて、俺をにらみつけるようにしながら、負けずに声を上げた。

「あうーっ、勉強の邪魔だってば」

もちろんその声にははっきりと俺に対する非難の色が含まれていたし、何よりも真琴の表情が如実に物語っている。

だが、しかし！

真琴の反論くらいで引き下がらぬくらいなら、最初からこんなことはしないと断言するものだ。と言うものの、正攻法でやってもまた天野にたしなめられるのがオチだ。

「プールにでも行きてーよな……」

まずはため息混じりに、そつと愚痴をこぼすようにしてみた。さすがに正面切って騒がない分だけ、天野の反応もそれなりにあるに違いないと踏んでいたのだが、そんなに甘くはなかったらしい。

「一人ですか？」

「そりゃつまらないだろうな」

『雪国の夏』

「でしょうね」

素っ気なく訊き返されて、それに対する俺の返事も素っ気なく返されてしまったのだ。

これはこれで、完全に無視されるよりもツライ気がするが……。まあいいや、ここであげ
ては俺の立場がない。

「…勉強やめて、プールでも行かないか？」

控えめにはあるが、ストレートな言い方で俺が提案すると、天野は真剣に困った表情
を俺に向けた。

「相沢さん…」

「いまは大事な時期だって、祐一が真琴に言ったくせに！」

天野は言葉を濁したものの、それを補うかのように続けた真琴の言葉は、確かに元は俺
が言ったものだ。二学期に編入するのが目標である以上、この時期は…と言うか、これか
らが総仕上げの段階になるんだからな

しかしながら、そんなことばかりを言っているのは、人生の楽しみと言うものをみすみす
逃してしまうことにもなりかねない。屁理屈だろうが何だろうが、遊ぶときは思い切り遊
ぶべきなのだ。さらに言うと、こんなに暑いときに部屋にこもって（それも健康な若い男
女が）勉強なんかしてはいけないのだ。

「それはそれとして、暑い日にプールに行くのも大事なことだからな」

「うーっ、それは祐一のワガママよう」

どうやら真琴には俺の見事な論理展開が理解できないようだが、「ワガママよう」のひ
とことですまされると、無性に腹が立つぞ。

『雪国の夏』

「ああ、ワガママだよ。だから、もつと言うぞ。プール行きてーっ」

「相沢さん：ちよつと：」

「うるさいわねっ！」

天野は相変わず困った顔、真琴は言うまでもなく怒り顔。：ま、ここは真琴を落とせば、あとは民主主義の原則に従って多数決によりあっさりと決まるだろうから、真琴を挑発するのが一番早そうだ。

「おつ：そうか、真琴はどうせ水着なんて持っていないし、水着姿に自信もないに決まっているから、プールなんか行きたくはないだろうけどな」

あからさまに相手を挑発してるのは、言葉だけでなく俺の態度でも分かったろうが：。

「何よつ、それ！ 真琴だって！」

真琴は素直に乗って、勢いよく前に乗り出すようにしながら、俺をにらみ返す。いや、狙った通りと言えばそうなんだけどな、こう簡単に乗られるのも毎度のこととは言いがら、ちよつと拍子抜けだ。

「真琴も相沢さんの挑発に乗らないで：」

「美汐ちゃんはその言うけど、祐一に言いたいこと言わせて平気なのっ？」

おさえようとする天野の言葉に、真琴は語調を強めながらはつきりと反論を返した。ここまで来れば、いまさら天野に諭されたところで真琴があっさりと言引かないのは確実だな。「わたしは別に：」

ちらりと俺の方を困ったように見つめる天野の視線がほんの少しだけ痛いものの、それさえもはや大したことじゃない。いや、天野がこうして止めようとすればするほど、真

『雪国の夏』

琴は意固地になつていくだけだ。その辺ははつきり言つてまんま子どもなんだよな、真琴は。

「真琴はダメっ！ あーんなこと言われて、引き下がるなんて絶対にしないわよっ！」

真琴がさらに大きな声を上げたとき、ふいに俺の部屋のドアが開いて、その場に似合わない落ち着いた調子の声が届く。

「みんなプールに行つて来たらしいんじゃないかしら？」

「え？」

思わずひとことだけ発しながら、声のした方を見ると、そこにはいつもと同じ笑顔の秋子さんの姿があつた。だが、冷たい飲み物でも持つて来てくれた様子ではなく、秋子さんの手にはお盆もジュースも見当たらない。その代わりにと言つては何だが、片手に白い封筒を持つていた。

さすがにいきなりそれでは俺にもさっぱり話が分からないので、控えめに秋子さんの真意をただそうと試みる。

「あの、秋子さん、どうしてそんな話になるんですか？」

言い出しつべが訊くような内容ではないが、それはこの際置いて欲しい。

秋子さんは部屋に入つて、天野や真琴、そして俺を軽く見回した後、俺に向かって答えてくれた。

「今日は確かに暑いですが、プールに行くのも悪くないと思いますよ。ちょうど知り合いからプールの利用券を頂いていたものですから」

「それは要するに夕ダ券つてことですか？」

『雪国の夏』

念のためにと俺が確認をすると、秋子さんは小さくうなずいた。

それにしてもここでプールの利用券とは、いかにも御都合主義的な流れだとは思うが、相変わらず秋子さんの友好関係はナゾが多い。が、それをいまさらここでとやかく言っても意味がないことだよな。

などと、俺が秋子さんのナゾに思いを馳せると、不意に真琴がつぶやいた。

「でも、真琴は水着持っていないし…美汐ちゃんだって…」

言った後、真琴は天野の方をそっと伺うようにして、また頭を下げてしまった。天野の方もさすがに秋子さんの提案には困惑してるようで、真琴には何も言わずにただ黙っているだけだ。

俺は思わぬ強力な援軍を得た気分になっていた。天野が何も言い返せない以上、事態は俺の望む方向に進むに決まっている。真琴もすでにプールに行くこと自体には反対してないしな。

後の問題は真琴が言うように水着か…と俺が言おうと思ったところに、先に秋子さんがそれについての解決策を提示してくれた。

「それなら祐一さんに渡そうと思っただけのお金があるし、これでみんなの水着も買って行ってもいいんじゃないかしら？」

そう言いながら秋子さんは、片手に持っていた白い封筒を俺に差し出した。

言葉の内容と態度から察するに、この封筒にはお金が入っていると言うことだろう。

何のお金なのがわがわがに気になったものの、秋子さんが「これで買ってきていいですよ」と言ってる以上、俺が細かいことを気にする必要はないだろう。

『雪国の夏』

「いいんですか？」

念のために秋子さんに訊き返しながら、俺はその封筒を受け取った。

「ええ、さっきも言ったけど、これは祐一さんに渡すお金ですから、祐一さんが構わないなら」

秋子さんの表情には別段含みなんてないし、俺にくれるお金だったと言うことなら、なおさら俺が気にすることはないわけだ。

結論が出た以上、プールに行くのをためらう理由はない。

「構うわけじゃないじゃないですかっ！ よしっ、これでさっそく出掛けることに決まりだな！」

思わずガツツポーズなんぞをしながら、天野と真琴に向かって告げると、すぐに真琴の元気な声が返ってきた。

「やったーっ！」

もちろん表情も声に負けないくらいに、本当に嬉しそうな笑顔だ。しかし、天野はそんな小気味いい反応を示してはくれなかった。

「天野も行くよな？」

機先を制するつもりで俺は天野に向かって言った。内容こそ意思確認のものだが、すでに喜びはしゃいでいる真琴と言う秘密（でもないか）兵器のおかげで、その言葉には半強制の含みがある。

「相沢さんに悪いですから…」

ま、天野ならそう答えるだろうとは思っていた。水着に自信がないとか、勉強を優先さ

『雪国の夏』

せましようとか言うんじゃないかと、お金を使つてまで……と言うのが天野にとって一番困つてゐる理由だらう。

確かに天野は無理に付き合わなくても構わないのだが、それでは俺の楽しみが減つてしまふじゃないか。

どうやって天野を説得しよう？

やっぱり真琴を使うのが一番だろうか？ 将を射んと欲すれば……つてやつだよな。どっちが将で、どっちが馬なのか分からないけどな。

「どっちにしても、いままさら勉強を続ける雰囲気でもないと思うぜ？」

自分がさっきまでの雰囲気をつぶ壊しておいて、いままさら何もあつたもんじやないが、真琴はすでにプールに行く気になっているし、秋子さんもそれを良しとしている以上、流れはすでに決まつている。

「でも……」

すでに予想された反応を示す天野。しかし、ここで天野だけを帰すと言うのも釈然としないし、真琴もそれでは納得しないだらう。ちよつと早い気もするが、とつと切り札を出すしよう。

「お前一人だけ帰すわけにはいかないだらう？ これまで一緒に勉強見てくれた天野もたまにはこうした息抜きしてもいいんじゃないか？」

「それはそうですけど……」

おや？ まだ落ちないか。それなら、さらなる一手を。

「真琴もお前がいた方が楽しいに決まつてるしな。それにな……」

『雪国の夏』

「何ですか？」

「お前が一緒にいてくれた方が、俺も楽しい」

本当のところは「一緒にいてくれた方が、俺は楽」なんだが、字は一緒なんだし、この際問題ないだろう。

それに対する天野の反応はというと、

「…あっ…相沢さん…」

何故かどうもってたりする。おまけに、微妙に困ってるような表情から、笑ってるような怒ってるような悩んでいるような…とにかく不思議な表情になっていた。

いつの間にこんな高等技術をマスターしたのか。さすがの俺にも正直言って、これは反対してるのかそうでないのか、よく分からないぞ。

と、俺が次の手を出しあぐねていると、ここぞとばかりに助け船がやってきた。秋子さんだ。

「ちょっと天野さん、こっちに来てくれるかしら？」

天野に向かって小さく手を振りながら、秋子さんはそのまま廊下へと出ていく。

「はい？」

いきなりの誘いに天野も少しだけびっくりした様子で答えながら、秋子さんの後を追って廊下へと出ていき、やがて俺の部屋のドアが静かに閉じられた。

「何の話をしてるんだ？」

ひとりごとのようにもらす俺の言葉に、俺同様に部屋に残された真琴が相変わらず浮かれた表情で答えた。

『雪国の夏』

「真琴には分からないよ。ね、それよりも祐一、本当に水着買っていいの？」

：「ったく、こいつはさつきから静かだと思つてたら、ずっとそればかりを考えていたのか。」

「まあな……と、そう言えば、これいくら入つてるんだ？」

構わないぞと言いながら、先ほど秋子さんから受け取った封筒の中身が実際どれだけのものか確認していなかったことに気がついた。

「秋子さんがいいつて言つたんだから、ちゃんとみんなの買えるぐらいはあるんでしょう？」

「たぶんな。まあ、いま確認するから待て」

「うん」

封筒の口を開いて、真琴から見えないようにその中身を確認すると……一万円札が六枚ほど入っていた。水着の相場つてのがよく分からないものの、これなら十分足りるだろう。

「これなら、十分だな」

真琴には金額は言わずにそれだけ告げると、真琴はまたも嬉しそうな表情でひとこと。

「やったあつ！」

何がどう「やったあつ」なのかはさておき。ちょうどそのとき、ドアが開いて天野が姿を見せた。すぐ後ろに秋子さんも続いてくる。

「お待たせしましたね、祐一さん」

「話は終わつたんですか？」

「ええ。それじゃ、三人で楽しんで来てね」

『雪国の夏』

秋子さんはそれだけ言うと、俺の部屋から出ていった。表情はいつもと変わらない秋子さんだったが、天野に何を話していたのかがちよつとだけ気になる。

「なあ、秋子さんに何を言われたんだ？」

ダメもとで訊くと、天野はクスツと小さく笑つてみせた。

「相沢さんには内緒ですよ。そう言う約束ですから」

「秋子さんとの約束か？」

「はい。少なくともいまは話せませんよ」

秋子さんとの約束…となると、俺がここで無理に訊いてもどうにかなりそうな気が全然しないのは何故だろう…。でも、天野は「少なくともいまは」と言う但し書きをつけていた。

「いまはつてことは後でなら聞かせてくれるのか？」

「ええ、後でなら。…気になりますか？」

「気にならないと言えばウソになる」

まあ、そんなに気になるつてわけでもなかったりするんだが、ここまではぐらかされるつと、かえつて…なあ？

だが、どうやらこの話題に関しては、すっかり天野に主導権をとられてしまつていているらしい。

「じゃあ、後でも話しませんから、ずっと気にしててください」

「ぐつ、お前…そりや卑怯じゃねえか？」

すっかり遊ばれているような感じだが、俺の反論（と言うほど大したもんじゃなかった

『雪国の夏』

が) に対し、天野は真面目な表情で切り返す。

「そんなことはありません。気にするのは相沢さんの勝手ですから」

ぐはっ!

俺の勝手とまで言われてしまつては、いまさら何をどう反論しろと?

まあ、これ以上は気にせずに、楽しいことを考えた方がより建設的だな。我ながらいい加減かも知れないとは思ふものの、こうして切り替えができることは決して悪いことじゃない……よな?

「……まあ、いいや。とりあえず、いまは気にしないでおこう」

「そうですね。その方が相沢さんらしくていいですよ」

ふと、そこに真琴の聲が割り込んでくる。

「ねーねー、プール行くんでしょ? だったら、早く行こうよ!」

「だな」

「その前に、買い物ですけどね」

こうして俺たちはひとまず片づけをしてから、買い物&プールへ向かうべく、夏の暑い日の下へと出ていった。(もちろん、出掛ける際に秋子さんからプールの夕ダ券を受け取って、だ)

夏の午後の日差しはかなり強い。が、人の心なんてのは現金なもので、これからプールに行くとなれば、むしろこの強い日差しも何となく悪くはないなんて思えるくらいだった。

暑ければ暑いほど、プールに行く意味つてのが強調される、と言う具合に俺は自分の中でいように解釈しつつ、暑いさなか買い物をするために駅前へと向かった。

『雪国の夏』

そして、大量の汗を流して、駅前デパートに着いた。涼しい店内の心地よさにホツツしながら、俺たちはさらに目的の店へと向かう。

だが……。

何とも水着売場ってのはヤローには居づらい場所だったってことを初めて実感した……いや、してるところだぞ。

男もんの水着なんて大したコーナーじゃないし、そもそも俺だって適当に選んで、すぐにすんじまった。

それに比べて、女性の水着コーナーってのは……色んな意味で華やかだ。

ディスプレイされている水着にしても、ハンガーに掛かっているたっくさんの水着にしても、それを手にとって嬉しそうに話をする女の子（中には「子」じゃないのもいるが）の会話にしても、な。

やれやれ……。

真琴のやつはすっかり、その華やかな女の子の仲間入りをしてしまってるようで、あれこれと水着をとっていたりする。天野はと言うと、真琴に引きずられるようにあちこち連れ回されているが、別に困ってるようには見えない。

「あまりゆっくりしていると、時間なくなるぞ」

無駄とは思いつつ、真琴に向かって俺が叫ぶと……ふいに店内の女性の視線がこっちに集中するのが分かった。

こ、これは……ちよつとイタイかも。マジな話、この雰囲気つらい……。

どうしようもない居心地の悪さを感じていると、そばに天野がやって来てそつと俺に

『雪国の夏』

言ってきた。

「相沢さん、ここに居づらいようでしたら、わたしがお金を預かりますから、下で待つてくれてもいいですけど…」

たぶん、見るに見かねて…と言うところだろうが、この際天野の提案に反対する理由はない。

「おお、わりいな。それじゃ下のコンコースの自販機コーナーにでもいるから、なるべく早めに切り上げさせてくれ」

それだけ言いながら、（小銭入れを残して）札の入った財布を天野に渡す。

「はい、分かりました。それじゃ、お金預かりますね」

少しでも早くその場から立ち去りたい一心で、俺は天野の言葉を背にして、ひとまずコンコースへと向かった。

人波を避けるように自販機コーナーへと辿り着くと、冷たい缶コーヒを買って、備え付けのベンチでそれを飲む。ここで一人で缶コーヒを飲むのは、はつきり言っつまらないが、少なくとも水着コーナーで所在なさげにしているよりはマシだ。

よく言われるように、女の準備には時間が掛かるらしいから、五分や十分では天野たちは来ないだろう。まあ、ゆっくりと飲むとするか……と思つて、俺がゆっくりと缶コーヒを飲んでみると、意外に早く天野の姿が視界に入ってきた。

時計を見ると、俺がここに来てからだいたい十分くらいだった。

「お待たせしました」

俺のそばにやってくるなり、天野は軽く頭を下げながらそう言った。だが、そう言われ

『雪国の夏』

るほど待っていたわけでもない。現に俺はまだコーヒーを全部飲みきってはいなかったのだ。

「いや、意外に早かったな」

最後に残っていたコーヒーを飲み干して、俺は天野に正直にそのままを伝えた。すると横にいた真琴が嬉しそうに言い始めた。

「へっへーんだ、真琴はそんなにのんびりしてないんだからねー。美汐ちゃんだってすぐに決めちゃったし」

真琴の表情から察するに、それなりに気に入ったものを選んで買ったに違いない。

「どんなの買ったんだよ？」

何気なく俺の口から出たのは、まさ素朴な疑問と言うやつで、特に下心なんてのはなかった。そのせいか、真琴も天野も別に嫌そうな顔を見せたりはしない。

「そんなの言ったら、後での楽しみがなくなっちゃうじゃないのっ」

「そうですね、相沢さん。それでは、お財布返しておきますね」

別段怒っている口調ではなく、二人とも何となく楽しそうにしながら、そう返してきた。

俺は天野が差し出した財布を受け取りながら、まあ確かにその通りだと納得して、二人につられるように笑って答えた。

「まあ、それはプールでのお楽しみとするか」

すると、すぐに真琴がそれに反応する。

「祐一のスケベっ！」

「アホか、お前は。水着でスケベも何もあるもんかって」

『雪国の夏』

水着程度でスケベ呼ばわりされては何もできないじゃないか……って、別に変な含みはナシだぞ。

ま、いいや。

とりあえずは、水着も調達できたことだし、後はプールで楽しむだけだ。

「アホの相手なんかより、まずはプールに行くことが大事だよな」

「あうー、アホって誰のことよう」

「アホは決まって自爆するもんだ。『アホって誰のこと?』とか言ってるな」

「それって真琴のこと?」

「分かっているなら、訊くな」

「あうーっ!」

「相沢さん……それくらいにしてあげてください」

「ああ、分かっている。それじゃ、行くとするか!」

天野の許しが出たので、ひとまず真琴をからかうのはやめて、ゆっくりと歩き出す。本当のハナシ、ここでくだらん掛け合いを続けているのは時間の無駄でしかないしな。

「はい」

だが、返ってきたのは天野の声だけ。どうやら真琴はまだ俺に文句を言い足りないようだが、ここで拗ねてもしょうがないことくらいは分かっているはずだ。

「あうー……真琴、アホじゃないわよう……」

納得してない感じはするが、それでもプールに行くことには従っているのは真琴の姿を見なくても、十分理解できた。と言うより、こいつもプールは楽しみにしていることが、そ

『雪国の夏』

の態度から余裕で感じ取れるんだから当たり前だ。

それから、まともや暑い外気にさらされることしばし。

俺たちは秋子さんから聞いた場所、タダ券の使えるプールへと着いたのだが…。

「本当にここ…ですか？」

天野の声がかすかに戸惑いの色を含んでいた。

「たぶん、だけどな…」

同じように俺の声も戸惑いを隠せなかった。

「ねえー、ここなの？」

真琴だけは特に戸惑いなどなく、ただ単に訊ねているだけのような。

秋子さんに聞いて俺たちが辿り着いたのは、何と高級ホテルだったのだ。それもたぶん

「超一流」って頭に付きそうな。

「相沢さん…」

「ちよい待て。タダ券を見てみるから…」

困惑を隠せない天野の声に、俺は秋子さんから受け取ったタダ券をよく見てみると…い

ま俺たちの目の前にあるホテルの名前とともに、「上得意様向け プールご利用券」と書かれていた。

「…間違いないらしい」

「ここで泳げるの？ どんなプールか、真琴楽しみー」

「相沢さん、その券見ていいですか？」

俺は苦笑しながら、タダ券…いや、上得意様向けのプールご利用券とやらを天野に渡し

『雪国の夏』

た。この上得意様って何だよ、一体…。そりゃ水瀬家が決して貧乏とは言わないけどな、こんなホテルの上得意様になるほど豪勢でもなかったと思うんだが…。

一人ではしゃいでいる真琴をよそに、すっかり困惑を隠せない俺の表情を見て、天野は意外に冷静な口調で言った。

「確かにここでよさそうですね。秋子さんも人からもらったような言い方をしてみましたから、ここがどんなところかまでは分かっただけでも知れないですけど」

なるほど…。そう言えば、「知り合いからもらった」ってなことを言っていたな、秋子さんは。しかしなあ、何と言うか、高校生のガキがほいほいと遊びに来るような場所でもなさそう…。

「でもなあ…」

「ですね…」

俺が言葉を濁した内容が、天野には十分伝わったらしく、二人して目の前にある高級ホテルを見上げてしまう。

だが、しかし。

「ねえねえ、入らないの？ せっかく水着買ったんだから、プール行かなきゃ意味ないじゃないの」

そうだ。

水着だ。せっかく買ったんだから、ここでプールあきらめるってのはおかしいんじゃないか？（建前）

ここで引き返したら、クソ暑い中でこれまで流してきた汗が無駄になってしまうじゃな

『雪国の夏』

いか！（本音）

そうだよ、真琴だって口ではああ言いながら、新しい水着を着たくてしょうがないに決まってるんだ。（建前）

俺も二人の水着姿をゆっくりと鑑賞したいしな。（本音）

そうそう、何と言っても秋子さんの厚意を無にしちゃ悪いしな。（建前）

それにいまさら、本当のガキが大勢いるような市民プールとかへ行くのも釈然としないし。だいいち、人が多すぎるところじゃ、ゆっくりと鑑賞なんか出来やしないじゃないか。

（本音）

ってことは、だ。

俺の取り得る選択肢は一つしかねえってことだ。

「よし、ここに入るぞ！」

「うんっ」

「…いいんですか？」

相変わらず天野は慎重な…と言うより怪訝そうな態度を示しているが、真琴がすでにその気になっている以上、いまさら覆すつもりは俺にはない。

「まあ、秋子さんの厚意を無にできないし、真琴もすっかりその気になってるしな。それに、こんな高級ホテルのプールの方が安全だろ？」

「…確かにそうですね」

さすがに俺がもう腹をくくったのを感じとってか、天野は一度だけ小さくため息をついた後、苦笑ぎみに賛成してくれた。

『雪国の夏』

そうと決まれば後は行動しかない。

ちよつとだけ意気込んでホテルのロビーへと入っていき、そのままフロントに行つてみた。

もしかしたら「ガキはお断りです」みたいなことを言われるかも思っていたのだが、フロントに利用券を見せると、そのまま丁寧に対応されて、これまたバカ丁寧なくらいに、ロビーにいたホテルマンがプールへと案内してくれた。

「この先がプールへと続いておりまして、こちらが更衣室になっております。貴重品などがありましたら、クロークへお預け下されれば、ご安心してお楽しみいただけると存じます」

：何つか、俺たち三人は偉く場違いなんだが、姿勢好よりも持っていた利用券の威力と言うやつだろうか。ひたすら丁寧なホテル側の対応には、恐縮すると言うよりも、どこかでおかしさを感じるくらいだった。

「そんなに凄いか……」

ホテルマンが俺たちに一礼して去っていくのを見ながら、俺は思わずひとりごとのようにつぶやいてしまった。

すると、天野も同じようにため息まじりに続けた。

「こう言つては失礼かも知れませんが……ちよつとおかしいくらいですね」

確かに……と、俺がうなずいていると、さつきから全然恐縮なんて感じていそうにないヤツが横から口をはさんでくる。

「ねえねえ、早く着替えて行こ？」

「まったく、お前はホントに場の空気とか雰囲気とか、読めないんだな」

「そんなのどうでもいいじゃないの。ね、早くプールに行こつ」

「本当に真琴にはかなわないですね」

「そうだな。まあ、それじゃ、着替えてくるとすつか？」

「はい、それでは後ほど、プールで」

「おお」

ひとまず俺もいつものように軽く答えて、更衣室へと向かった。

とは言っても、男の着替えなんてのは、これまた味気ない上に時間もかかるものじゃない。ササツと着替えて、プールに出てみると案の定、二人の姿はまだ見えなかった。

とりあえずヒマだったので、プールの様子を眺めてみると、いかにも高級ホテルの付随施設らしく、全体的に優雅と言うかそこかしこにゆつたりとした高級感がにじみ出ていた。別に豪華とか言うんじゃない。とにかく、「優雅」のひとことに尽きるだろうな、これは。

人の数もそれほど多くなく、これならゆつたりとした……ちよつと優雅な気分を味わえそうだ。初めはちよつとだけビビっていたが、何はともあれ、秋子さんに感謝しておこう。

俺が一通り様子を確認して、プールサイドのテーブルセットの一つに陣取ると、白い服に身を包んだボーイがやって来て、

「ドリンクサービスはいかがでしょうか？」

と、これまた恭しく言ってきたもんだから、つい気取ってブルーハワイとか適当に知っているカクテルの名前を言いそうになったものの、俺は未成年だ。

「未成年なんでアルコールないヤツで、お勧めのをくれるかな？」

『雪国の夏』

「はい、かしこまりました」

何せこっちはこんな場所は初めてだ。イマイチ勝手が分からないので、無難な注文をしたつもりだったが、それで十分通じたらしい。ボーイは一礼して、俺のいたテーブルから離れていく。

と、そのボーイの後ろ姿を追って見ると、ドリンクのカウンターがあったが、よく見るとそこには「アルコール類は取り扱っておりません」と但し書きがあった。

何だ、それじゃ未成年とかなんて言わなくてもよかったのか…と、俺がそのカウンターの方をぼんやりと眺めていると、不意に誰かが俺の名前を呼ぶ声があった。

「…相沢さん、お待ちせしました」

誰だろう？ などととぼけたことを言うまでもなく、それは天野の声なんだが…。

「おお…って、あれ？」

俺の目の前には、可愛い女の子が一人いるだけなんだけど…。

「あの？」

心なしか困惑した様子で首をわずかに傾げるしぐさを見せる女の子。

悪いなと思いつつ、俺は何となく違和感を感じて、その女の子の姿を上から下までよーっとく観察してみた。

「お前、天野なの？」

「…そんなに変ですか？」

ふるふるっ。

俺は無言で、しかも素早く、そして激しく首を振った。

決して変ではない。が、いままでの天野とはまた全然イメージが違ったりするから、正直な話戸惑いも隠せなかった。

「つか、よく考えてみれば、俺はいままで天野のこんなカッコなんてみたことねえじゃねえか……って、何故か開き直っちゃうよ？ 学校で水泳の時間はあっても学年違うから、水着姿なんて見ることはほとんどないし。これまで一度もプールに行こうなんて話したこともなかったしな。」

「それなら……よかったです」

天野はほんの少しだけ表情をやわらげて、安心したように笑った。

「うーむ。これはなかなか……っと、天野の笑顔に見入るようにしていると、後ろからやたらと元気な声が聞こえてきた。」

「あっ！ 美汐ちゃん、それに祐一、見つけたわよ！」

言うまでもなく、このクソやかましいのは真琴だよな。

元気に走ってくる真琴の姿をはっきりと確認して、思わず俺は「プールでは走るな」としっかり事前に教えておくべきだったと後悔した。まして、ここはガキがうようよいるような場所じゃない。さほど多くもないが、視線がにわかにはこちらに集中するのが感じられる。

しかしまあ、そんなことに真琴は何にも関係ないと言う感じで、俺と天野のいるところまで一気に走り抜いてきて、開口一番元気に告げる。

「お待たせー」

「真琴、嬉しいのは分かるけど、あんまりはしゃぎ過ぎるなよ」

『雪国の夏』

「あー、何言ってるのよう。真琴はガキじゃないんだからねっ」

とか言いつつ、やってることはガキそのまんまなんだが、そのまま言い返したら、いま以上にやかましくなるだけなので、ここはひとまず黙ることにしよう。

「しょうがないですよ、相沢さん」

天野も苦笑ぎみに俺の無言の反論に賛同してくれた。まあ、確かにはしゃぐなど言っても、真琴にはそれが無理なのは分かっていたし、場の雰囲気でしおらしくなるようなら、それは本来の真琴じゃないしな。

やれやれ…と、イスに深くもたれかけるようにすると、真琴は俺の目の前にでんと立ってみせた。

「祐一、どお？」

そう言っつて、真琴は両手を腰に当てるように、偉く威張ったような態度を見せる。

「何が？」

「何っつて、水着よ、水着。真琴の水着、凄いでしょっ！」

「ああ…そのことか…」

と、そう言えば、まだ二人の水着について、じっくりと観察…いや、鑑賞をしていなかったな。威張って言われる筋合いもないとは思いつつ、ちょうどいい機会なので、俺はそこで真琴と天野の水着を改めて見てみた。

えーっと、それじゃまずは言い出しっべの真琴から。

白地にトロピカルカラーのフラワープリントのワンピース（ハイレグ）。胸元は深いVカットで、バックスタイルはセパレーツに見えるタイプ…か。

『雪国の夏』

何と言うか、可愛いプリントとは裏腹な挑発的なカットティングが真琴らしいと言える、そんなところだな。胸元の深いカットが何と言うか、微妙だ。うん、実に微妙な色気を演出しているぞ。

それで、天野の方は、と…。

と、そこで改めて天野の姿を見て、俺はさつき感じていた違和感に気がついた。

スカートだ。それも短いヤツ。

水着にそんなのあるとは知っていたが、こうして着ているのを見るのはまた何と言うか…：まあ、いいや、とりあえず水着の説明に行くとしよう。

水色小花模様のセパレーツ&ミニスカートで、トップは3/4カップでやや上げ気味な感じで、アンダーはハイレグではなく布地もやや多めな感じ。問題のスカートは丈が短く、普通に立っていても下（と言っても水着だが）が見えるくらいのプリーツスカートつてやつだ。

いやはや、純然たるビキニ姿ではないのが天野らしいと言えるんだが、妙に視線を誘うよな、これは…。つーか、恥じらいつてのがそここに感じられて、めっちゃイイ感じ。

何と言っても、裾から見え隠れするあたりが…：むう…：もしかして俺って変…：なのか？

「どうなの？」

「あの…相沢さん？」

……。

すまん。いまの俺には何も語るべき言葉が見つからないぞ。

や、敢えて言うならこれだけか。

『雪国の夏』

「祐一？」

「…いいい」

「え？」

「あははっ、やっぱりそうよね！ 真琴の水着姿は祐一にはきつすぎるよね」

「違う、お前じゃなくて」

「えっ…その…」

「くうー、その恥じらいがまた何とも…」

「あ、相沢さん…」

おもむろに天野はそう言っ、体を丸めるようにかがんでしまう。隠しているつもりなんだろうが、これがまた意外に嬉しい…いや困ったもんだったりすることに、本人は気付いてない。

今度は胸だよ。胸の谷間つーやつが微妙に強調されて、俺の視線の先にあたりするわけなんだな。天野ってそんなに胸あったか？ と言う素朴な疑問が浮かんでしまうが、要はそんなことは問題じゃない。

「何よう！ それじゃ、真琴のはどうなのっ」

縮こまる天野とは正反対に、真琴はさっきよりもふんぞり返って俺に囁みついてきた。

どうって言われても、真琴の水着には別に意外性も何も感じなかったのは事実なんだから、言いようがないのだが…それでは話は収まりそうにない。

「どうって言っても、お前には恥じらいってもんがないからなあ…。そんなに堂々として『どう？』って見せられても、何かありがたみがない。やっぱり恥じらいは大事な要素だ

な」

何にとつて大事なのか、と言う話はこの際置いて欲しい。イヤ、別に真琴の水着が似合っていないとか言うんじゃないんだ。確かに意気込んで買っただけのことはあると思う。

だが、何かが足りないのだ。

そして、その真琴に足りない何かを、これ以上もないほどに身にまとっていたのは天野の方だったと言うだけなんだよな。

「相沢さん……」

「オヤジみたいなこと言ってる」

俺の言葉に対する反応一つにしても、天野と真琴の差は大きい。天野が困ったようにするだけなのに対して、真琴はあからさまに不機嫌な顔になって、変なものを見るような目つきで俺を見てやがる。

「うるせっ！ そんなに俺のことをオヤジって言うんだったら、俺は天野と一緒にいるからお前は一人で適当に遊んでろ」

「あつ相沢さん……」

「ふーんだ！ 真琴の良さが分からない祐一なんてこっちから願い下げよっ！ 美汐ちゃんが我慢して付き合ってくれてるのが分からないんだから、ホーン트에めでたいヤツよねっ」

ほとんど子どものけんかのやり取りだなと自分で思いつつも、たまには真琴にもお灸をすえてやる必要がある。

「そなのか？」

『雪国の夏』

視線をずらして天野に確認を請うと、天野にしては珍しく、即答だった。

「いえ、そんなことはないです」

「ならオツケーだ。とゆうわけで、ガキはあつちで遊んでろ。俺と天野はオトナの楽しみをするからな」

「うーっ、それならいいわよっ!」

真琴はすっかり怒気に染まった顔で、それだけを言い捨てると同時に、俺たちに背を向けて、ずかずかと大股で歩いてプールの水際へと腰を下ろした。

「…いいんですか?」

天野は心配そうに真琴の様子を見ているが、俺は軽く苦笑しながら答えた。

「ここはそんなに人もいないし、大丈夫だろうさ。それに、たまにはいいんじゃないか?」

「それはそうですね…あの子、相沢さんに自分の水着をほめて欲しかったんですよ」

「それは分かってるけどな」

「意地悪ですね、相沢さんは」

これを意地悪と言うのは、ちよつと違うだろう、天野。他の女の子のいる前で、水着をほめるのはちよつとな…って思いはあったんだ、俺の中にな。

だいいち、真琴はいつも一緒にいて言いたいことは言えるけど、天野はそうじゃないんだぜつてのは、理由にはならないか…。

まあ、どっちにしても俺の言いたいことはまるで分かってないようで、天野はせっかくの水着姿にも関わらず、すっかりいつものおばさん臭い表情になっている。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもねえ」

そのときの天野の表情と姿勢の違和感に、妙なおかしきを感じて俺がかすかに苦笑している、トレーを持ったボーイが近づいてきた。

「お待ちせいたしました。当ホテルのオリジナルドリンクです」

さきほど頼んでいた飲み物が届いたと言うわけだが、よく考えれば、俺一人だけつても悪い気がするので、ついでに二人の分も頼むとしよう。

「同じのを、もう二つくれる？」

「はい、かしこまりました」

丁寧な頭を下げて、俺の注文に応じたボーイがテーブルから離れていった後、いまさらのように天野に向かって、

「天野も飲むだろ？」

と、訊ねてみた。普通なら先に確認するべきなんだろうが、天野はそこで妙に遠慮なんてしかなないから、こう言うのは有無を言わずにどんどん頼んじまうに限ると言うわけだ。

「いいんですか？」

「それくらいは遠慮するなよ……っと、先に飲むか？」

テーブルに置かれたグラスに手を伸ばして、それを自分の方に寄せる前に一度天野の方に差し出したが、天野は小さく笑うと同時に軽く手を上げた。

「いえ、後で。あの子と一緒にいいですから」

『雪国の夏』

「そうか、じゃ、お先にもらうわ」

「はい、どうぞ」

俺がグラスを自分の口に運ぶのを見ながら、天野は同じテーブルセットのイスに腰を下ろした。

ふと、その際に「どっこいしょ」なんて言ったりするかな、と実にはかげたことを考えたりしてみたが、よく考えたらいくら天野がおばさん臭くても普段からそんなことを言ったりはしていなかった。

天野も黙って微笑んでいれば、それだけで三割増しくらい可愛いのに。いや、いまの格好なら五割増しは堅いか？ まあ、とにかく、普段のおばさん臭い喋り方だけはどうにかして欲しいもんだ。

と、俺はオリジナルドリンクとやらを飲みながら、何気なく天野の様子を見ていると、天野はさつきよりは慣れたのか、特別恥ずかしそうにはせずに、ただ困ったような表情を見せるだけだった。

だが。

こんなのも悪くはないな…と、ようやく俺がゆったりした気分になり始めたとの同時に、またもやそれを打ち破るように、

バツシャーシューシューーン！ と、割と近くで派手な水音がした。

さらに水音に続いて、絶叫にも似た声が俺の耳を刺激した。

「あうーうーうーっ！」

「真琴っ？」

『雪国の夏』

慌ててグラスをテーブルに置きながら、念のためにと周りを見回すと、天野もほぼ同時に立ち上がって、音のした方向を指さしていた。

「あ、相沢さん、あそこですっ」

「何だってんだ？」

天野の指先の示す先、すなわち声と水音のした方を見ると……。

プールサイドからすぐのところ、つまり水際でバシャバシャと派手に暴れている真琴の姿があった。

「…あいつ、何やってんだ？」

どうも俺には遊んでいるようにしか見えないのだが、天野は真剣な眼差しで俺に向かって言った。

「とりあえず、助けないといけませんね」

「じゃあねえな…」

冷静な口調ではあったが、何となく天野が焦っている感じがしたので、ひとまず俺は、それだけ言い残してプールへと身を投じた。

って、おい。

このプール、全然深くねえじゃねえか。

俺が入ったところの水かさは、腰よりわずかに上と言うくらいで、一メートルちょっとくらいだろう。

なのに……俺のすぐそばで暴れている真琴は何だってんだ？

「相沢さんっ！」

『雪国の夏』

何となく事情の掴めない俺に、発破をかけるように天野の声が届く。

そうだな、とりあえず、真琴を引き上げるとするか…。

「あうー…つ、祐…いー」

情けなく声を上げ続ける真琴にそとと近づいて、振り回している手や足に当たらないように気をつけながら、真琴の体を支えるようにした。

もともとそんなに深くないのだから、俺が立った状態で真琴を支えれば、それで十分なのだ。

「おい、真琴、落ちつけて！　ここはそんなに深くないんだから、普通に立つても平気だぞ」

まだ少し暴れている真琴に向かって俺が声をかけると、真琴は少しずつおとなしくなっていく。

「あうー…つて、立つても平気…？」

「そうだぞ」

「…あれ？　ホントだ…：ちゃんと真琴でも平気だ…」

「やれやれ…：一体何やってんだかなあ…：ほら、ひとまず上がるぞ」

「うん…：…」

ようやく落ち着いた真琴の体を放し、まず先に真琴を上がらせて、続いて俺が上がると、先ほどのボーイやらホテルの人たちが幾人かやって来ていた。

さすがにことがことだけに、それは当然だろう。だが、見ると、彼らには天野が何か話しているのが分かった。恐らくは「大丈夫ですから」とでも言ってるのだろう。本当にこ

『雪国の夏』

う言った場面で頼りになるよな、天野は。

そして、しばらくしてから、ようやく人の動きがいつも通りに戻り、周囲の視線も特に感じなくなった。

真琴はイスに座って、騒動の合間に届いたジュースを飲んでいる。

俺と天野も同じテーブルセットのイスに腰を下ろし、真琴の様子を伺っているだけだ。

「で、何やってんだ？」

俺が短く訊くと、真琴はグラスをテーブルに置き、うつむいたまま上目遣いにこっちを見つめながら、つぶやくように答えた。

「あうー…、祐一たちはどうしてるかなって思ってた振り向いてたら…：バランスを崩して…そのままプールに落ちちゃったの…：」

バランスを崩して…：まあ、それはいいとして、落ちただけで何であんなに暴れたりするんだ？ って、まさか、こいつ…。

と、俺と同じように疑問に思ったのか、天野もわずかに怪訝そうにしてみせる。たぶん、天野の出した結論も俺と同じだろう。

「真琴、もしかして、あなたって…」

「あうっ、それ以上言わないで…」

上目遣いをやめて、ただ頭を下げるようにするだけになって、真琴が文字通りに頭を下げて懇願しているが、とにかく結論は確認しておかないといかん。

「泳げないのか？」

「あうーっ…」

『雪国の夏』

俺の確認に対して、さらに頭を下げて言葉に詰まらせるだけの真琴。これはつまり肯定したってことだ。

それにしても、だ。

あれだけはしゃいで、いざプールとなつて、その本人が泳げないなんてな。何と言うか、真琴に悪いがな…。

これは笑うしかねえよな、うむ。

「くっ…ぶはははははははははは…」

「なっ何よう…二人して笑うことないじゃないのよう……」

二人？　と言われて、天野の方を見ると、確かに天野のやつも笑っていた。どうやら、俺とほぼ同時に笑っていたらしい。

「すまんすまん」

「ごめんなさい。でも、あれだけ張り切ってたから、まさか泳げないと言うとは思わなかったから…」

「よし、それじゃ、ジュース飲んだら、真琴の特訓と行くかつ！」

「あうーっ、せっかく勉強休みにして遊びに来たのに、プールでも特訓なんていやうー」

「相沢さん、それはちょっと真琴にひどいですよ」

「はっはっはっ、分かっているって。や、ちょっとからかってみただけだ。気にするなっ
て」

「あうーっ」

『雪国の夏』

「ま、特訓なんて野暮なことは言わないから、とにかく今日は目一杯楽しむことにしようじゃねえか」

「そうですね」

その後、俺たちはひたすら遊んだ。

水着のついでに買ってあったと言う（俺は知らなかったが）ビーチボールを真琴が出してきた、天野&真琴ペアと俺の対戦なんかをやった。もっとも、俺は時々どうも視線が天野のスカートに行ってしまうらしく、つまらないミスを連発しては、真琴を喜ばせてしまう結果になったが。

まあ、真琴も泳げないと言いながらも、はしやいでる限りでは別に恐がりではなかった。それだけはよかったと思う。怖がっていてはせっかくのプールの楽しみが半減どころじゃないからな。おかげで、本当にあつと言う間に時間が過ぎていった。

そして、帰り道でのことだ。

「相沢さん、今日は本当に楽しかったです、ありがとうございました」

いきなり天野が丁寧にお礼なんかを言い出したのだ。

「何だよ、いきなり…」

「いえ、本当に相沢さんには感謝していますから。それと…真琴にも」

「うんっ、今日は美汐ちゃんと一杯遊べて、真琴も楽しかったよ！」

天野の表情はいつもの真面目なもので、俺にはどうもその真意がつかめなかった。真琴はそんなの気にして居る様子もないけどな。

「…相沢さん」

『雪国の夏』

「何だよ？ 何か気になることでもあるのか？」

俺がそう訊いたのはわけがあった。と言うのも、天野の表情がかすかに困っていると云うか何かを気にしているような感じに変わっていたからだ。

「いえ……今夜は暑くなりそうですね」

「何のことだ？」

「何でもありません……」

相変わらず歯切れの悪い言い方しか天野はしてこなかったが、俺にはやっぱりその理由が分からなかった。

でもまあ、分からないんだから、あまり気にしてもしょうがない。そんなわけで、俺は天野の気にしていることへの考察をやめた。天野のことだから、機会さえあれば、話してくれるだろう。

その夜。

風呂から上がった俺は火照った体を居間でのんびりとしながら冷やしてから、自分の部屋へと行った。

だが、昼間から外出していた上に、帰ってきてからもほとんどここにいなかったので、部屋の中は思った以上に蒸していた。

「うあ……これは寝苦しそうだな」

ひとまず、寝冷えしない程度でも部屋を冷やそうと思い、俺はおもむろにエアコンのスイッチを入れた。

秋子さんには昼に話をしておいたから、早ければ修理は今日にでも来ると言っていたは

『雪国の夏』

ずだ。

ピッ、とりモコンの操作音が不思議に心地いい。
だが。

肝心のエアコン本体は何の音も出さずにいた。

これ、静音タイプだっけ？　と言うボケをかますまでもなく、要するにこれは「動いていない」のだ。

ピッ、ピッ、ピッと何度もリモコンの運転ボタンを押してみるが、やはり動き出す気配がない。

…まさか？

修理していかない、のか？

俺は突然に突きつけられた恐ろしい事実の前に、急いでそれを確認すべく自分の部屋を後にした。そして、居間に秋子さんの姿を見つけて、すぐさま訊ねてみた。

「あの、秋子さん！　俺の部屋のエアコンなんですけど…」

と、俺が言い出すと、秋子さんは不意に思い出したように笑って見せた。

「すみません、エアコンの修理のことを言うのを忘れてたわね」

「へ？」

忘れてたとか言う割には、秋子さんの表情には余裕と言うか、全然気にしている様子がない。

「ええ、今日お願いしてあったんですけど、祐一さんが出掛けた後に断りの電話を入れておきましたから」

『雪国の夏』

「べ、別に修理をしないつもりじゃなかったんですけど…」

出掛けたからって、修理を断ることはなかったんじゃないですか、秋子さん…とまでは言わずにいると、さすがに秋子さんの表情は、

「困ったわね」

って、全然困ってる様子のないまま、笑顔で顔を当てるだけだ…。

俺はそこで何となく、天野の表情と言葉の真意がおぼろげながら、見えてきたような気がした。

あの金って…秋子さんが渡してくれたあの金って…まさか…。

「すみませんが、しばらく待っててくれますか？」

あまり考えたくはない結論だったけど、どうやらそれが一番当たっているような気がする。

「しばらくって…」

「電器屋さんも忙しいらしくて、来月まで予定が詰まってるそうですし、あのお金ももうそれほど残っていないでしょう？」

「ぐはっ…」

やはりッ！ そうだったのか！

あの金は、真琴と天野と俺の水着とその他雑費に消えたあの金はッ！

エアコンの修理代だったのな…。って、天野はそれを知っていたんだな、あいつ…そうか、あのときだ。秋子さんに呼ばれて廊下に出たときに、その話聞かされたに違いない。

駄目だ、やっぱり秋子さんには俺はかなわないぜ…。

『雪国の夏』

かくして、その晩。

俺はエアコンのない部屋で、寝苦しい夜を過ごすことになった。

しかし、この体の火照りは暑さのせいばかりではないような気がしないでもない。

と言うのも、目を閉じると、真琴の胸元やら天野のスカートやら胸の谷間やら、昼間の水着の二人の映像が浮かび上がってしまい、それも俺を寝苦しくさせているのだった。

「ちくしょー！ー、寝られねーじゃねえかっ！」

翌朝のテレビの天気情報では、「昨夜はこの夏初めての熱帯夜だった」と報じていた。なお、エアコンの修理がされたのは、それから一週間後だった。

『雪国の夏』

あながき

水着を絡めた話の割に、水着の場面が少ないような気がしなくもないです。が、それも成り行きの一つですから。名雪がまったたく出てこないとか、秋子さんの水着はないのかとか、色々と思いはありますが、こんな感じで真琴と祐一と天野の（そして秋子さんたちの）日常は続いていくわけです。それが、破綻する日は……あるかも知れないし、ないかも知れない。いまはそれだけしか言えませんね。それでは。

2001/04/04 初版 ash

PDF書式変更:2016/05/22